

税の架け橋

新発田市立猿橋中学校 3年 大滝 裕理奈

「じゃあ、またね。元気でね。」

お盆とお正月に会いに行く祖母に手を振ってふと思う。あと何度祖母の笑顔を見ることができるだろうか、と。どんなに健康で元気に見える人でも半年の間にこの世界から姿を消してしまうことだってある。祖父や曾祖母のように。けれど、姿が見えなくなっても一定期間は記憶として残る。祖父や曾祖母を知る人は二人のことをいつも誇らしげに語る。自分の持つ記憶を精一杯言葉にしようとする。時に父は、警察官であった祖父をいつも誇らしげに語った。私は、祖父が具体的にどんな仕事をしていたのかは知らないけれど父の話がたくさん聞いて、祖父は強く優しい人であるという印象を持っている。

ある日ふと思った。警察官の給料はどこから出ているのだろう、と。父に尋ねると、警察官を含めた公務員の給料は税金から出されていることを教えてくれた。私の身近なところでも税金が役に立っていたことに気がついた。私たちが税金を払う。それが警察官の人たちの生きるためのお金となる。警察官は世の中の人々が安心して生きることができるようにする。私も警察官がいるから安心して生きられる。つまり、税金を払うことは自分以外の人々が安心して生きることにもつながり、自分自身が安心して生きることにもつながるということ。そう考えるとなんだか嬉しくなった。

ところで、私は中学三年生になってから租税教室というものを受けた。そこでは、税金が老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するための費用として使われていることが分かった。具体的には、医療機関や介護福祉施設を整備することなどに使われているのだが、高齢化社会と呼ばれる今、働き手の給料が低いことや働き手不足、そもそも国民一人当たりの負担が大きくなっていることなどが問題となっている。これらを知った時、私は危機感を覚えた。このまま高齢化が進めばお年寄りが安心して生活できなくなってしまう。彼らの助けとなっている人たちの生活が危うくなってしまう。私は考えた。私たちに何かできることはないか。答えはすぐ近くにあった。それは、まず今まで通りに税金を払い続けること。次に、医療機関や介護福祉施設などについて、そこで働く人々について知ること。最後に、身近な人に親切にすること。家族や親戚、近所の人などとの関係を持っていることが日々の安心につながると思う。

私たちは税金を払うことによって自分の目の前にはいない、どこかの誰かと繋がっている。私はそれがすごく嬉しかった。私も少しではあるけれど誰かの役に立っているのだ。この世界ではみんなが誰かの役に立つことができるのだ。そして祖父はその人たちをつなぐ架け橋となっていたのだ。そんな祖父をいつまでも記憶の中に少しでも残しておきたいと思う。